元田の地に住みついたことも、商人が台頭してきた傾向の例を身近にみることができて興味深い。

一方、大鳥居の建っていた弥越の峠とは、いったい歴史的にどんな意味があったか考えてみたい。そこには梅年礼山を囲む古市・下野・上岡・上野・大坂本五か村があり、これを守る庄官御鱗家が、江戸期以前から近くの小崎に居宅を構えていた所で、その権威の程が知られる。

佐伯氏滅び、次の毛利氏も「享保十三年（一七二八）藩主高慶侯愛宕神社に参拝し、尺間愛宕大権現と崇め奉る。」と「霊峰叙慮」（高司隆著）にあり、同年社殿改築、祭日を七月二十四日と、十一月二十四日に改め、直参・代参の制を定めている。

また元治元年（一八六四）十二代高慶侯が、植松から尺間山に参拝したのが、藩主としては始めてのこととされて藩主が江戸に参勤する際も、城下の五所明神、白潟の若宮八幡宮、大日寺・住吉神社、それに植松の愛宕神に参拝し、神酒を捧げていることが、毛利藩の資料に記されている。

愛宕神社の歴史の古さ、そして格式の高さは、佐伯氏、毛利氏に庇護され、尊崇されたことでもわかるが、それがそのまま、あの大鳥居に象徴されているようである。さらに御鱗家・市野瀬家と深い関係にあることを知れば、私達元田人は得難い歴史的な文化財を持っている誇りを覚え、その保護をしなければならない責任を痛感するものである。

（おわり）

（編集者曰う）昭和五十年六月以来十三回にわたる連載は、これで終った。僅か四十二戸の元田の地区を中心に、ふるさとの歴史はいとも丹念にまとめられたが、これが近く出版の運びと力説するようである。ユニークなこの成果を喜びたい。

随想

本匠村雑記（その一）

―古塔あれこれ―

会員　羽柴　弘

これは、これまでの「因尾物語」を改題し、それに続くものとして書くもので、その延長と考えてほしい。

ご存知の方もあろうが本匠村は私の故郷で、役場が前から右にはいった宇津々という谷間の集落で私は生い育った。その故であろうか、村史編さんの仕事を仰せつかって、今毎日のようにバスで通勤している。

村史となればやはり文献をしらべ、実地に資料をつかむことが第一と考え、六月以来参考図書や古文書などをあさり、ひまを見つけては村内あちこちを歩き、村の長老たちにきき、現地を踏んで、既にかなり珍らしいものをつかんでいる。

そもそも村名の本匠は、昭和三十年六月、旧因尾村と旧中野村が合併の際、両村とも番匠川の本流、その源流地域を占めるので、本匠村と名乗ったとのこと、この村名はよかったと思う。

番匠川は弥生町内で梶内川と井崎川を受け入れ、本匠村に入っては久留復川を合せ、その外村内でいくつもの支流の水を加えているが、その本流は樫ノ峯に発するだけに、少し大袈裟にいえば佐伯人にとっては「母なる大河」である。そしてもし番匠川文化と名付けるものがありとすれば、それはどうも本匠村の山岳地帯、樫峯・山部・腰越あたりから発祥しているような気がする。そんな前提に立って、村史編さんの余談のようなものを、筆

の赴くままに書いて及ようと思う。

⑦ 宇津々の古い塔

私の生まれた里は、県道から一キロ半ほどはいりこんだ、まるでポケットの中みたいな山村、四方の山々が高くそそり立ち、平地はほとんどない。富裕な桃源境のような所でなく、全く貧寒な山里である。（少し言いすぎかな）しかしどうも人が住みついた、その発祥はずい分古いようである。なにしろ一万三千年前の「聖嶽古代人」の頭骨の出ているところである。

さてそれは別として、人家四十戸ほどのこの村里には、珍らしい古い塔がいくつかある。古いといっても、どれも江戸時代のものに過ぎないが……。

まず第一は、村の中央にある庚申塚である。多少あちこちから集められてもいようが、そこには大小さまざまな庚申塔が、実に三十五基ほど並んでいる。広くもないところにそれがひしめき合っている様は壮観であるが、注目すべきはその半数を占める十七基が、稚拙ながら青面金剛像の彫り出しである。

本匠村内にはあちこちどの村里にも、必ず庚申塔の五基や七基はある。しかしたいてい庚申塔とか青面金剛と文字で書かれてあり、その中に一基かせいぜい二基が像を刻んであるくらい。それがここには十七基も建てられている。私は類例を見たことがない。

その二は程近い地蔵庵の境内、六地蔵塔や卵塔のずらり立ちならんだ中に、一きわ高く建てられている経石塔である。その正面には、篆書で「経王二字一石塔」と大きく刻まれている。普通墓塔の類は楷書、ひょっとすると隷書は見かけるが、外に全く見たことがない。

それも一字一石でなく、二字一石である。せまい山里小さな谷川には経石用の小石が少なかったからか、またはあえて表裏に一字づつとしたためであろうか。

造立は明和九年（一七七二）菊月（陰暦の九月）、この年は全国的な風水害で大凶作、まことにめいわくな年ということで、十一月に安永と改元している。この年この経王二字一石塔を建てた村人たちの悲願は何であったか。

導師は海福寺の良山和尚、銘文は恵堯庵主であるが、くわしいことはわからない。ともかくも二字一石塔ははじめてである。

その三は同じ宇津々のユブ（油布又は弓夫と宛てている）の庚申塔、老い朽ちかけているムクの大樹のかげに建つ巌基の塔が建てられている。このうちの三基、いずれも庚申塔と文字であるが、同じ元禄十五年午（一七〇二）の造立である。しかも二基は高さ一メートルを越す、元禄様式の花崗岩製、一基は凝灰岩ではあるが大きさも右の二基に劣らない。いったい、なぜ同じ年に三基も建てたものか。しかも花崗岩となれば当地になく、造塔については物心両面相当苦労せねばなるまい。

このユブ部落は今七軒、八軒目が新築されつつあるが、昔から六軒しかなかった小部落であった。それがこのような、同じ年に三基の塔を建てたとなると、この小部落は、当時よほど繁栄していたのであろう。

これを裏付けるように、すぐ近くの杉林の中に、元禄二年（一六八九）の造立になる「龍月妙光禅定尼霊塔」（高さ一二〇糎）の壮麗な墓がある。ただし倒伏しているが風化もなく、かなり裕福な家庭の婦人墓である。

いわゆる典型的な、大型の元禄墓であるが台座がない。察するに墓地はもっと高い場所であろう。なぜかなら倒

伏している現在地は傾斜のひどい杉山の中である。だからそれらの疑問をユブの人達に出しているが、どうもその解答はもらえそうにない。

② 義民杢右衛門の墓

これは宇津々でなく、元田尾村の上津川にある。墓といわずに、供養塔と呼ぶべきであろうが……。下上津川の川向う、人家のすぐ上の旧墓地にある。

文化九年といえば今から百六十六年前、藩の要求に悩んだ田尾・中野・横川・仁田原・赤木・上直見・下直見、以上七か村の農民が蜂起した百姓一揆であった。

正月十二日、一揆勢は田尾から横川に押し出し、蒲簾竹撞をかつぎ、鉦・太鼓を鳴らし法螺貝を吹いて氣勢をあげ、横川・仁田原・赤木とその勢を加え、山奉行・酒屋の居宅を襲い、上下直見勢を加え、その数三千に達していた。

あわてた佐伯藩では暴徒鎮圧の兵をくり出し、篠山峠で対峙して物々しい極みであった。ついに藩の宿老戸倉織部が死を堵しての説得によって鎮圧されたが、一揆勢もその要求が叶い、それぞれ引揚げて事なきを得た。

だが犠牲者が出た。首謀者上津川村杢右衛門・文七兄弟は番匠川原で斬首七日のさらし、その外村々の主だったものは、遠島・所替となり、一揆に参加した全員は過料ということで落着した。

その杢右衛門が供養塔があった。高さ一・五五㍍の地蔵塔である。なぜかその正面に「孫吉　二十三才」とあり、向って右側中央に戒名その両側に年月日、「寂照道光信士　文化九申年　正月十三日」と彫られている。

供養地蔵塔

これだけでは、杢右衛門の供養塔であるとは急に言えないが、私は推理してこんなに思った。

イ、まず延刑後家の者はその遺体を引取り、上津川につれて帰って埋葬したはず、しかし藩庁をはばかり墓石はつくらなかったであろう。

ロ、三年か五年の後、七か村の一揆に参加した農民たちは、義民杢右衛門の墓の代りに、金を集めてこの供養地蔵塔を建て、ひそやかながら僧侶によって開眼供養を営み、杢右衛門の霊を慰めたと思われる。

ハ、戒名はその導師から貰ったもの、月日はあえて延刑月日をさけ、逮捕された日をえらんでいる。義人杢右衛門が身を捨して首謀者を名乗り出た、決意の日をえらんでいる。これは導師による決定だろう。

ニ、俗名の「孫吉」はどうか。杢右衛門と刻まることは憚りがある。どのようなお咎めがあるかわからぬ。この孫吉は恐らく杢右衛門の幼名であろう。

ホ、「二十三才」ならまだ妻子もなかったのではないか。身軽なからだならこそ、率を一身に引き受けて名乗り出る、高邁な犠牲的決意が出来たのであろう。

ヘ、では、弟の文七はどう扱われたか、今のところ何もわからない。

以上は独断な推測である。折を得て毛利家文書でさがしたいが、この供養塔のことが書かれているかどうか。

ついでに今一つ、対岸の県道わきに、猟の名人安藤政吉が建てた「殺生供養塔」がある。昭和二十四年建立で新しいものだが、猟師の霊魂供養の営みは、うるわしいことといえよう。

（おわり）